

---

# フォローテックの殺人鬼

竜丸

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

フォローテウツクの殺人鬼

### 【Nコード】

N8952B

### 【作者名】

竜丸

### 【あらすじ】

「これで7人目か……」この眩きから事件は始まった。小さな町で起こる、猟奇的な連続殺人事件。誰が犯人なのか見つけるようにと、犯人を見つけられないまま時だけが過ぎてゆく。

(前書き)

これは少しグロテスクな表現があると思います。  
少しですが、人は死ぬので嫌な人は見ないでください。  
純粋なミステリー好き人は、少し物足りないと思います。  
不思議な力も登場するので。

1909年 10月13日

朝靄立ち込める中、綺麗に揃って合唱をする烏達。雑木林は黄色い落ち葉の絨毯を敷き詰め、秋が訪れたと告げている。その黄色い景色の中にあつて、一際目立つ白い布が敷かれている場所があつた。その白い布の下を確認して男が呟く、「これで7人目か……。」と。腰から下を何者かに持ち去られた女性が、そこで永遠の眠りについていた。

ジョン・マッケンロー。先程女性の遺体の確認をして、今は警察署に足早に帰っている男の名前。この男、エリートではなかったものの、今まで迷宮入り寸前や解決困難な事件を、ものの見事に解決しており、僅か8年で警部にまで昇進したほど優秀だった。ただ今回の事件は、男が初めて壁にぶつかっているとあつて、警察署では迷宮入りになるのではともつぱらの噂だった。この事件の始まりを遡ると、今年の1月の事になる。

4月24日

「騒がしいな。事件が起きたのか？」

いつもなら誰よりも早く署に来るマッケンローが、この日は珍し

く遅刻しており、気まずそうに署の中を覗いた。普通なら出入り口付近は受付の女性しかいない。しかしその日は、署の中で嵐が起ったように物が飛び交い人が溢れていた。この町の治安はとても良く、警察官が隣町で起こった事件を手伝いにいつても、何の問題もないくらい町の町。そんな町にあるこの警察署がこれ程騒ぎになる事はなかった。マッケンローはすぐに中に入らず、扉のところでは拳動不審に辺りをキョロキョロ見回して警戒している、見たことがない巡査に喋りかけた。

「何か起きたのか？」

「え？ あ、はい。随分と奇怪な事件が起きたんです。それで、この署では珍しく騒がしいのです」

「奇怪？ どんな事件だ？」

この時巡査が視線を何度も何度も上下させ、それが終わると上半身を後ろに逸らし、警戒心剥き出しでマッケンローに話しかけた。

「あの、あなた誰ですか？ は！ も、もしかして、事件に関することでも聞きまわつてるとか……。いや待て、まさかこのことを嗅ぎつけた新聞記者とか！ いやいや待てよ、もしかするともしかして、は、犯人なのか！ いや」

などと完全に暴走して、ブツブツと壁に頭をつけて独り言を言い出した。この巡査を相手にする気になれなかったマッケンローは、胸に手を当てるがあることに気づいた。

“しまった、手帳を忘れた”

そう思って胸に落としていた目線を巡査に戻すと、まだ壁に頭をつけてブツブツと呟いている。すると、慌しい警察署の中には似合わない、とても明るく若い声がマッケンローに飛んできた。

「あれ？ そんなところで何してるの、マッケンロー？」

その声の主は、13歳の警部ビリー・ブレット。

マッケンローもかなり若い警部だったが、この少年には負ける。マッケンローは現在28歳で10年目。マッケンローが警部になっ

た同じ年、この少年も警部になった。

なぜこれほど若い警部が誕生したのか？ その理由は、ビリー・ブレットが持つている不思議な能力、死体に触れると犯人の声で殺害する時に何を考えていたかが聞こえ、同時に犯人の名前を知るという能力。それ以外にごく稀に、死体になった人間が殺される時に見た映像を見れる事があつたが、それはなぜ見れるのか本人にも分かっていない。

この不思議な能力を使えば、どんな事件でも確実に解決できる。ただ、そんなに簡単にこの能力を使う事を周りの刑事たちがさせなかつた。それは、13歳の少年に人を殺す時の感情を聞かすのは酷であり、重大な事件が起きた時に能力が使えなくなっていたら困るという2つ理由。刑事たちがどれだけ困難な事件でも、1ヶ月に1回、多くても2回までしか使わせないと上限を決めていた。

その少年ブレットが、困っていたマッケンローを見つけたのだ。

「ああ、ビリーか。ってそうだビリー、一体何が起きたんだ？」

「あはは」と、13歳らしい笑い声が騒がしい廊下に響いた。マッケンローが先程の事をブレットに話したためだつた。マッケンローは一刻も早くどういう事件なのか聞きたかつたが、この慌しい廊下では聞く事が出来ないと思い、自分の部屋にブレットを連れていって内容を聞くことにした。

先程の騒がしい廊下とは打って変わり、自分の部屋がある2階の廊下はいつもと変わらない、静かで緩やかな時間が流れていた。その事にマッケンローは内心呆れていたが、そんな事は口に出さず、心臓が刻む鼓動と足の速さが同じ位早かつたマッケンローと、先程の事でまだ笑つてまともに歩いていなかったブレットとの差はかなりの距離になつていた。マッケンローが部屋に入って椅子に腰を掛

けても、まだブレットが入ってこない事にイライラして待っていると、徐々に静かな廊下からブレットの笑い声が近づき、その声が部屋の前で止まると同時に目に涙を溜めたブレットが部屋の中に入ってきた。

「……。客用の椅子があるだろビリー」

ブレットは部屋に入ってくるなり、笑ったままマツケンローの机に飛び乗った。

「あは、あははは。若くして、天才警部といわれる、あのジョン・マツケンローも、手帳を持ってないと、犯人に思われるなんて。それにしても、その巡査も、顔ぐらい覚えとかなないと、ね。なにせ、天才警部、ジョン・マツケンロー、だもんね。はは」

「ああ、どうせ俺は刑事向きの顔じゃないからな。それよりも、もうそろそろ教えてくれ。この署がこれほど騒がしくなる、奇怪な事件ってやつをな」

「あははは。あは、はあゝ。わかったよマツケンロー」

座っていると足の付かない机から飛び降り、今度は先程マツケンローが言った客用の、ブレットが座っても足の付く木の椅子に座り話し始めた。

「女の人の死体が見つかったんだ。皮を剥がれた女の人の」

「皮を剥がれた、女の死体？」

「そ、全身の皮を剥がれたね。しかも、もの凄く綺麗に剥がされてるんだよ。そして、その皮の剥がされ方が不思議なんだ」

「不思議？ どういう風にだ」

「ホントに皮だけ剥がされてるんだよ。だって頭には髪の毛が残ってたし、爪も残ってたんだ。けど、頭と爪の下の皮は剥がされてる」

「どうやってたらそんなことが出来るんだ？」

「……。僕に聞かないでよね。流石にそんな事まで分からないよ。

それと、どうやって殺したかもまだ分かってないんだ。死因不明ってやつ」

「そうか。その言い方なら、お前能力使ったんだな？」

「もちろん使ったよ。けど、ここで3つ目の不思議な事が起きちゃって。なんと！ 名前が聞けなかったんだ、犯人の名前。それだけじゃなくて、声も雑音が入ってて男か女か区別が付かなかった」

「ほお。そんなこと、前にもあったのか？」

「うんうん、初めて。あ、それと、初めて繋がりでその犯人の雰囲気も初めてだったんだ。だって大概の犯人って、怨みながら殺したり、謝りながら殺したり、殺すことを相手のせいにして殺したり、後は正当防衛や偶発的に死んでしまっって感じの声なんだけど……。今回の、この事件の犯人の場合は違ったんだ」

「どんな風に違ったんだ」

「うん、何て言うのかなあ……。何か、冷静で、特別な事情があるみたいだった」

「そうか、事情ね。それで犯人は何て言ってたんだ」

「それが、『私にはあなたの皮が必要な』って」

2

10月13日

「それで、今回も声ははつきりと聞こえなくて、『私にはあなたの下半身が必要な』とだけ聞えたってワケか」

「そ。でもね、やっぱりこの事件の犯人って不思議なんだよね。だって、僕的能力って本当の心の声を聞くことなんだよ。それなのに、一言だけしか聞えてこないって不思議じゃない？」

「そうだな。お前が言うには、大体の犯人は錯乱状態になってるんだろ？」

「まあ普通はね。でもこの犯人は、本当にそれだけが目的なんだよ。」

殺したいんじゃないやなくて、その部分が欲しいだけなんだよ。きつと」

「何だビリー。随分とこの犯人の肩を持つんだな」

「そうだね。何で僕はこの犯人の肩を持つんだろ……。ねえ、何でかなマッケンロー？」

「俺に聞くな」

その時、マッケンローの部屋の扉が勢いよく開いた。

「すみません！」

入ってくるなりそう大きな声で謝り、寝癖だらけでボサボサになっている頭を凄い勢いで下げたと同時に、背負っていたリュックから同じような凄い勢いで、床に物が散乱した。この数ヶ月間で、すっかりこの一連の事が朝の恒例行事と化していたために、2人に大した反応はなかった。

「相変わらず騒がしいね、クレアちゃんは」

クレア・ハートマン24歳。今年の4月にこの部署に配属された女性の刑事。化粧をしておらず、切るのが面倒くさいとただ伸ばしている長い黒髪。眼鏡を掛けているが、度数が合っていないらしく、遅刻や間違いが多い。あまりにもそういうことが多いので、優秀だが若いマッケンローに押し付けられたのだ。

「あのブレット君。私のほうが11歳も年上なんだけど」

「そんな細かい事気にしないの」

ハートマンがズレた眼鏡を直し、床に散乱した荷物を拾い集めていた。しかし、今日の物の散乱具合がいつにも増して酷かったため、ブレットがマッケンローの机から飛び降りて物を集めるのを手伝う。ブレットが手伝った事で、いつもより早く落ちていた物を全てリュックに直し終える事が出来たハートマンは、屈んだままブレットに礼を言う。「いいよこれぐらい」とブレットは答えて、マッケンローの机にまた飛び乗った。そのブレットと入れ替わるように屈んでいるハートマンの前を、ブレットよりも大きな影が覆う。マッケンローは大きな体を屈め、ハートマンと同じ目線に合わせて微笑んだ。

「随分と遅いですねえ、ハートマン君。一体これで、君は何日連続の遅刻ですかあ？」

そのあまりにもらしくない声に、ハートマンは屈んだ状態をさらに小さくするように下を向いて、とても小さな声で答えた。

「と、10日です……」

「凄いねえ、ハートマン君。10日連続はなかなかできないよあ。そうだビリー、お前そろそろ部屋に戻れ」

「え。もうちょっとクレアちゃんと一緒に居たいなあ」

「何だお前、クレアのことを好きなのか？」

その言葉にブレットはため息をつき、珍しく足組みをした。

「あのねマツケンロー。クレアちゃんみたいな子は、もう少し格好とか化粧を気をつけると、絶対可愛くなるんだよ」

「そうなのか、って、いいから早く部屋に戻れ！」

その言葉にブレットは渋々部屋を出た。そしてブレットが部屋を出て3歩目に、相変わらず静かな2階の廊下を、マツケンローの怒りの声が大きく木霊した。

「この声も朝の恒例行事になっちゃった」

今回の事件には共通点が4つある。1つは被害者が全て女性という事。しかし、その女性達の見た目には共通点がなく、住んでいる地域も違っていた。次に、ブレットの能力で犯人が特定できない事。もちろん、犯人が男か女かも今だに分かっていない。外傷などがまったく無く、殺し方がまったく分かっていないのも、犯人の声が聞こえない事が少なからず関わっていた。そして、最後の共通点が一番重要なのだ。それは、ある教会に1度は被害者が行ったことがある事だった。なぜか女性しかいないその教会に、今マツケンローとハートマンは向かっていた。秋が訪れたために、並木道に枯葉が舞う。そんな教会に続く道を進んで。

「神父様。やはりこの女性もこの教会に来たことがあるのですね？」

教会の一室に、机を挟んで50歳くらいの女性の神父とマツケンローが向かい合って椅子に座っていた。マツケンローはこの教会のシスターに話しを聞いたことはあったが、神父に話を聞くのは初めてだった。その時、マツケンローの後ろで椅子に座っていたハートマンが、大きな声を出してマツケンローを止めた。

「待って下さいマツケンロー警部。女性の神父なんて私、聞いた事ないんですけど」

そう言われて、女性の神父はハートマンに向かって、いかにも神父らしい微笑を浮かべて話しかけた。

「お嬢さんはキリスト教を信仰しているようですね。警部さんは？」

そう聞かれて、マツケンローは苦い顔を作り、戸惑いながら答え

た。「えっと、俺は、その……。宗教を信じる環境じゃなかったんですよ、ガキの頃。それに嫌いなんですよね。処女からキリストが生まれたあの、死者が蘇るだの、信じていれば来世が来るだの、全て」

「ちょっと待って下さい！」

マツケンローが喋り終わる前に、ハートマンが顔を真っ赤にしながら大きな声を出して立ち上がり、マツケンローに詰め寄る。

「警部は神を信じないんですか?! 信じないならそれは警部の勝手だからいいですよ、けど!!! ここは教会ですよ。教会でイエス様や神様を侮辱するのは許せません!!!」

それを聞き終わってから、女性の神父が顔と同じ様に優しい声を出して、茹蛸のように真っ赤になった顔のハートマンを宥めた。

「お嬢さん、人にはそれぞれ考え方があります。警部さんの考えは1つの考えであって、私やあなたのように信じる者をイエス様は見ているのです」

それを聞いて顔はいつもの色に戻り、椅子に座っていたマッケンローを突き飛ばしたハートマンはその椅子に座り、神父の手を取って目を輝かせて2人で語りだした。

「それで、神父と何を話していたんだ？」

マッケンローは先程突き飛ばされた時に擦りむいた肘を摩り、床に胡坐を組んだ座っていた。30分は部屋の中のハートマンが座っていた椅子に座りながら待っていたが、あまりにも暇だったので部屋を出て待つ事にしたのだ。それから2時間後の今、やっとハートマンが部屋から出てきたので、廊下を歩きながら喋っている。

「警部には関係ない事を話していたんです。それと、あの方は神父じゃなくて助祭をされてるんですよ」

「……。助祭って何だ？」

「警部がご自分でお調べください。ああそれと、その助祭様に聞いたんですが、今回の被害者の女性を覚えていたのも警部のお気に入りです。そのシスターらしいですよ」

それを聞いて、マッケンローは喜びを隠せないような、まるで踊るように体を反転させ、小走りでそのシスターの部屋に向かった。その姿を呆れながらもハートマンは付いていくことにした。

そのシスターの名前は、シスターレイア。もちろんシスターは名前でないもの、そう名乗っている。マッケンローはそのシスターレイアから歳を聞いた事はないが、1つ目の事件の聞き込みをしているときに出会ったシスターだった。そのシスターは、いかにもシスターといった格好で町を歩いていた。顔を全てベールで隠し、黒

と白の服を着て町を歩いてきた。そのシスターレイア以外の2人は顔を出していたので、マツケンローは最初、不思議な格好をしている思っていたが、話すとき意外と普通だったので安心したという。それからマツケンローは、事件の聞き込み以外でもこのシスターレイアと会っているのだ。

マツケンローは部屋の前で止まり、扉をノックして2人で部屋の中に入った。

「レイアさん、こんにちは。それである……。また、この教会に来た人が殺されたようですね」

「はい……」

部屋に入ってから、助祭の部屋と同じ様に机を挟んで、マツケンローとシスターレイアは始めのうちは世間話をしてきた。それを、ハートマンは退屈そうに後ろから眺めていた。そしてハートマンはこの時思う事があった。マツケンローは普段、笑顔で話したり冗談を嫌っている。まあ、起こる寸前には鬼にも似た笑顔をするが。なのに、シスターレイアと話す時はいつもと違う優しい顔で面白く冗談を交えて会話をしていた。

“私に話すときも、それぐらい優しく笑顔で話してくれればいいのに……”

そんな普段とは違うマツケンローで、シスターレイアの雰囲気がいぶ和やかになったところで、先程のような本題を切り出したのだった。

「それでレイアさん。レイアさんは、この女性がどんな様子だったか覚えていますか？」

机に目を落としながら首を横に振る。

「いえ。そこまで気をつけて、はっきりと見ていませんでした……。マツケンローさん！やはり、やはりこの教会に怨みがある人の犯行なんでしょうか？」

「俺にそこまでは分かりません。ただ……。レイアさんは心配しなくてもいいです。俺が必ず事件を解決してみせますから」

それを、一段とつまらないといった様子で、足を組んで椅子にっ  
いていた肘掛に肘を付き、手のひらの上に顎を乗せてハートマンが  
呟いた。

「カッコつけてるよ。警部」

本当にとても小さな、50センチ離れていれば聞き取れないよう  
な小声だったが、正面にいたレイアから、後ろにいたハートマンに  
マッケンローは顔だけ90度反転させた。その顔があまりにも怖か  
つたらしく、ハートマンは肘を付いた格好で固まった。

「あの、どうしたんですか？ クレアさん」

「いつもなんですよ彼女。何か怖い事思い出して固まるのが。あそ  
うだ、そろそろ何か分かったかもしれないので、我々は署に戻りま  
す。何かあったらすぐに連絡してください。飛んで駆けつけますか  
ら」

「ありがとうございます」

マッケンローが椅子から立ち上がり、シスターレイアに背を向け  
た。そしてマッケンローが部屋からハートマンを連れ出そうと腕を  
掴むと、ハートマンが些細な抵抗をした。

「あ、あの警部。わ、わ私は、もう少し、この教会の人たちに話し  
を聞きますから」

「そんなことは後でいいよ。今は署に帰ろうじゃないか、ハートマ  
ン君」

マッケンローは、シスターレイアに見えないようにして先程と同  
じ顔をしたので、ハートマンの顔が引きつり諦めて連れて行かれた。

枯葉舞う帰り道に、マッケンローの声が響いていた。

「おっ帰りい〜」

2人が署に入ってきたので、2人に向かってそう明るく声をかけ  
たブレット。その2人は教会を出てから1日中聞き込みをしていた

らしく、ハートマンの顔はゾンビのようにやせ細り、足をほとんど上げずにすり足で歩き、ブレットのその声を無視して椅子に尻餅をつくように突然座った。しかし、マッケンローはいつもと変わりない、いやどちらかというと、軽い運動後のような爽やかな顔になっており、どうやらハートマンのようにには疲れていないらしい。その爽やかマッケンローが、カウンターに座っているブレットを見て、すぐに疲れているを見抜いた。

「お前また能力を使ったのか？ 今回の事件に使いすぎだぞ」

「それがさあ。今回の事件の死体に能力を使っても全然疲れないって言ったでしょ。だから僕は、もしかしたら自分の能力がレベルアップしたのかと思って、違う死体に能力使ってみたんだよねえ。そしてら！ ものすっごい疲れたんだよ。しかも、久々に能力で疲れたから余計にそう感じたのかも。だからマリーさんに家まで送ってもらおうと思って、ここで待ってるの」

ブレットが座っていたのは、受付のカウンターだった。そのカウンターに女性が1人座っていた。どうやらブレットは、その女性に今まで話しかけていたらしい。

その女性の名は、マリー・グレック35歳。この歳で受付をしているほどの美人だが、とても冷たい事でも有名だった。そして案の定。

「そうだマッケンロー警部。そのウルサイ子供をどうにかしてくださいね」

そう言ってグレックが椅子から立ち上がると、カウンターを出て足早にロッカーに歩いていった。それを見て、珍しく落ち込むブレット。

「フ、フラれた」

肩を落として、ハートマンまでとはいかないものの項垂れているブレットに、グレックの姿が見えなくなっからマッケンローが言った。

「マリーさんは止めておけ。お前じゃ到底相手してもらえないさ。

おい、クレア。ビリーを家まで送ってやってくれ」

しかし、椅子に座れているのが奇跡なぐらい重力に負けて頂垂れているハートマンは、マッケンローがそう言ったのにはすぐに答えずに、呪文を唱えるようにブツブツと呟いていた。

「何で一日中歩き回らないといけないの？ だって、帰るって言ったのに……。それに、今歩ける状態じゃないっていうのも分からないんですか？ 私は警部みたいに」

「……何だかクレアちゃん、随分危ない雰囲気だね」

「ああそつえば。俺たち朝飯食ってから何も食ってなかったな」

現在の時刻は午後9時を回っていた。そして、クレアは朝ごはんを今日は食べていなかった。

「ごめんねクレアちゃん。つき合わせちゃって」

「いいですよ、奢ってもらってますから……」 “奢ってくれるって” という言葉を期待した私がバカだった……。リンゴって”

すっかり日が暮れて、昼のような子供の笑い声や商売をする声、鳥達の歌う声が闇の中に閉ざされた夜の町。そのとても静かな夜の町に、シャリシャリと2人がリンゴを食べる音と、2人の足音だけが響いていた。結局、ハートマンがブレットを家に送っているのだ。そのはずなのに、ハートマンは下を向いてリンゴを食べ、ブレットから遅れて歩いていた。

” 今日は疲れた……。家に帰ったらまず何をしよう……”

そんなことを考えながら歩いていると、意外にも時間が経っていたようだ。ブレットはハートマンが下を向いていかにも話しかけるなどという雰囲気だったために、この事について喋りかける時を窺っていたらしい。

「あのさクレアちゃん。君ってこの事件と関係あるでしょ？ マッケンローと組んでるといっても、あまり目立った動きをしない方がいいよ。結構、上から目付けられてるようだから」

ハートマンは驚きの表情を隠せなかった。あまりにも驚いたために、もう少しで食べ終わるリンゴを下に落としてしまうほどだった。

「な、何で知ってるんですか？」

「一応、僕だつて特殊能力だけにいるわけじゃないから。だから提案だけど、クレアちゃんはこの事件から外れたほうがいいんじゃないかな、この」

「嫌です！ 私はこの事件のためにこの町に帰ってきたんです！ だから……。だから！！ ってあれ、ここは？」

ハートマンの声が木霊するその夜の町は、ハートマンが見慣れていた景色の建物が並ぶ場所。ハートマンの家の前だった。

「送り届けたよ、クレアちゃん。それじゃあ、さっき言った事考えおいてね。僕はここで」

「あの」

「今度僕の家遊びに来てよ。リンゴと今日送り届けた礼は、それでいいから」

ブレットはそう言うと、ハートマンの家を後にして一人で家に帰っていった。それからブレットは、ある場所に寄った事もあって、1時間半後に自分の家に着いた。扉を開け、家の明かりを点けずに暗い部屋に向けて、独り言を呟いた。「ただいま」と。

4

フォローテウツクの殺人鬼『人体収集家・バロン』

ここの町で騒がれたしたのは、ごく最近の事だった。何処から情報が漏れたかは分からなかったが、フォローテウツクのようなそれ程大きくない町には、一気にこの噂が広がりその噂で持ちきりになっていた。しかもその噂の内容は、とても事細かな物だった。今までに

殺された女性は7人。1人目から並べると、皮・輪郭・鼻・目・唇・両腕・下半身の順番で、それらが死体から持つていかれ殺されたという事も、間違えずに伝わっていた。殺人のペースは1カ月に一回ぐらいという事も知れ渡っていて、次に狙われるのは耳か髪か上半身のどれかだと、大変な騒ぎになっている。

11月1日

「随分と騒ぎになってるね」

いつものように、ブレットがマッケンローの部屋の机に座って時間を潰している。

「そうだな。そしていつものように、クレアは遅刻だ」

「だね。でもさ、町での噂通り犯人は集めてるとしか思えないよね、人の体を」

「もしも、もしだ。犯人が体を集めてるとしよう。いや、お前の能力でも分かるように、現に集めてるのだろう。けどな、理由が分からんだろ。人の体を集める理由が。そこでだ、唯一犯人の声を聞いているお前としてはどう思ってるんだ、集めた体の使い道？」

「それは……」

「それは？」

「わっかんない！ だってえ、必要としか言っていないんだもん」

「……期待した俺が馬鹿だった」

マッケンローが机の上に溜まっている書類を片付け始めると、ブレットが机から飛び降りて、笑顔を作らずに逆に質問をした。

「マッケンローはさ、次はいつ起きると思う？ この事件」

「そうだな……。多分この月の終わりくらいだろうな、日にちは2

5日前後。忘れた頃について感じてだ」

「そうだろうね」

廊下に、物が散らばる音とバタバタと走る音が響き始めた。

「それじゃあ僕は、そろそろお邪魔するよ。朝の恒例行事が始まるからね」

そして、扉が開くと同時にハートマンの横をすり抜けてブレットは出て行った。それは朝の恒例行事の怒鳴り声が始まる合図のようだった。

しかし、2人の予想は完全に外れていた。11月に事件が起きなかったのだ。事件が起きなかったといつても、この地区での事件は起きていたが、フォローテウツクの殺人鬼が事件を起こさなかったのだった。そして現在は

12月23日

「ううう……。今日は12月23日なのに……。もう少しでクリスマスなのに、何で私はこんな喫茶店で朝ごはんを食べてるの?」

この日の朝、ハートマンが珍しく遅刻をしなかったので、「朝飯を奢ってやる」といって、マッケンローが連れてきたのが今ハートマンがいる喫茶店。町並みは、いつの間にか秋から取って代わった冬が雪の白に染め上げていた。しかし、その肝心のマッケンローは出かけていない。しかもこの喫茶店は、フォローテウツクの刑事たちの行きつけなので、体に積もった雪を払いながらよく刑事たちが来る。そして刑事が来るたびにカウンターに座っているハートマン

を見つげ、その度に「あれ、警部は？」と聞かれて嫌気が差していた。しかし、フォローテウツク署に配属になって初めて朝早く起きたため、店のカウンターに突っ伏していつの間にか眠りに落ちていた。

「起きろ！」

その突然の声に、夢では崖から落ちる夢を見たハートマンが、椅子から床に落ちて目を覚ました。目を擦りながらその声のした方を見上げると、そこにはハートマンを見下ろしてマッケンローが仁王立ちで立っていた。その顔はいつもと違い、強張り緊張感が漂っていた。

「行くぞ」

その言葉は、ハートマンのまだ働いていない頭では理解できないらしく、ゆっくりと立ち上がると、ずれた眼鏡を掛けなおして、涎を拭き、カウンターに置いてあった冷めたコーヒを一気に飲み干すと、椅子に座りなおしてゆっくりと冷たくなった朝ごはんの残りを食べようとした。その姿にイライラの限界が来たマッケンローが、ハートマンの耳を掴んで耳に口を付けんばかりに顔を近づけて大きな声で叫んだ。

「署に帰るぞ！ 8人目の犠牲者が出たんだ！」

「あれ？ 遅かったね、お2人さん」

2人が署に帰ると、グレックの隣の椅子に座っていたブレットにそう声をかけられた。マッケンローはブレットの姿を見ると慌てて聞いた。その問いに、いつも通り明るい声で頷きながら答えた。

「使ったよ。いつもと同じ様に今回も、「耳が必要」って言ったし、声もはつきりとは聞えなかった」

「そうか……」

そう呟いた後で、マッケンローが何処に死体があったのかブレットに聞き、署から2人で出て行った。それを見送りながら、ブレッ

トも小さく呟いた言葉があった。

「でも、今回はそれ以外にも聞えそうな言葉があったんだけどね」

2人は夜まで、遺体が見つかった場所周辺の聞き込みをしていたが、手がかりは何一つなかった。その事に2人は諦めて署に帰ろうとしたとき、夜になっても降り止まない雪でそれ程遠くまで見えない町を、1人歩いていたシスターレイアと出会った。

「こんな遅い時間に、どうしたんですかマツケンローさん？」

「いやレイアさんこそ、どうしたんですかこんな時間まで？」

シスターレイアは溢れんばかりに詰め込まれた、両手がいっぱいになるくらい大きな紙袋を持っていた。それをマツケンローの後ろに隠れて、怪しんで見つめているハートマン。しかしシスターレイアの答えは簡単だった。

「明日の夜はクリスマス・イブなので、今日のうちに買出しを済ませて、明日は料理をするだけという状態にするため、遠くまで買い物に行っていたんです。それで、警部さんたちは？」

言い難そうにマツケンローがしていると、後ろから顔を出してハートマンが代わりに答えた。

「また事件が起きたんです。多分バロンの仕業です。それを捜査していたんです、私達」

「そうだったんですか……。クリスマスも近いというのに、酷い事をする人もいるんですね」

「ええ、そうなんですよ。あそうだ、今夜は物騒なので送りますよ」

張り切って胸を張ったマツケンロー。

「それだったら、クレアさんも一緒に教会に来ませんか？ 綺麗な飾り付けが終わってる頃だと思っんですけど」

それを聞いて、怪しんだ眼差しから輝くような視線に変わったハートマンが答えようとしたが、マツケンローがハートマンよりも先

に答えた。

「いえ、ハートマン君は行かないみたいですよ。彼女は仕事熱心なので、まだこれから聞き込みをするみたいです。それじゃあレイアさん、寒いのでそろそろ行きますか」

「え、いやでも、クレアさんも1人じゃ危ないんじゃないですか？

女性の1人は？」

「確かに女性一人は危険ですね。じゃあハートマン君、今日は帰っていいよ」

そう言って、マツケンローに手を引かれたシスターレイアが教会に向かつて歩き出した。それを本当につまらないといった感じで見送ったハートマンは、寒いのでどこにも寄る事なく家にそそくさと帰っていた。

12月24日

ハートマンは昨日と同じ喫茶店にいた。席も昨日と同じカウンターの席、朝食に頼んだのも同じ物。二日続けて雪が降り、二日続けてハートマンも遅刻せずにマツケンローの部屋に着くと、部屋にはいつもいるはずのマツケンローの姿はなく、机の上に一行だけ書いてあるメモが置いてあった。そのメモには『昨日の喫茶店で待ってる』とだけ書いてあり、それをハートマンが実行していたのだ。

町を歩く、2人並んで。男の横には、雪景色の中でも一際輝くようなブロンドの綺麗な長髪を揺らす女。男はその輝く女の姿に、ただ何気なく見とれていた。女の動き1つ1つに。それに気づき、女は

照れながら笑う。それにつられて男も笑う。気温はとても寒く、人々は早足に歩くが、2人はその中をゆっくりと歩いていった。その時間はとても短い時間だった。だが、2人にはそれで十分だった。なぜなら2人は

昨日と同じように、ハートマンはカウンターに突っ伏せて眠りに落ちようとしていた。それを昨日と同じように、マッケンローが怒鳴り起こした。そう、フォローテウツクの殺人鬼は2日続けて殺人を犯したのだ。9人目の犠牲者は髪だった。

2人が署の扉をくぐると同時に、2人の周りを大勢の警官が取り囲んだ。2人を取り囲んだ警官たちの異様な雰囲気、2人は抵抗せず、フォローテウツク署の署長の部屋に連れて行かれた。

「ハートマン君、君には失望したよ。今回の事件の犯人は君だね？」

そう言われたハートマンは、思ってもいなかったその言葉に驚いて、思わず息をするのを忘れてしまった。が、その驚くハートマンを無視して署長は続ける。

「君は最初の犠牲者の妹だったね。目的は何か分かっているが、君にはアリバイが無いのだよ。アリバイが」

先程の言葉に思わず黙っていたマッケンローが、怒りの声で相手が署長にも拘らず怒鳴るように割って入った。

「そんな事あるはず不是吗！ それに我々は、まだどうやって殺したかも分かっている！ それはどうする」

「そうだよマッケンロー君。だから彼女には、取調べを受けてもらう。どうやって殺したのか、アリバイを証明してくれる人物がいるのか。そして、この事件を起こした目的は。この3点を重点的に」

この時、マッケンローの脳裏に昨日の事が思い浮かんだ。

「そうだ！ 昨日の8つ目の事件の時、クレアは喫茶店にいたはず  
です。それはマスターが証明してくれるはずですよ！ ですから」  
これでも署長は引かない。

「なぜ、彼女が事件の時に喫茶店にいたと思うのかね？ もしかし  
たら、いなかったかもしれないよ？ それに、殺されたのが一昨日  
じゃなかったら、ハートマン君の」

ここでマッケンローが、思わず口を滑らした。

「そんな事ないはずですよ！ 8つ目の死体は見つかった時まだ暖か  
かったんですよ！」

ここで署長とは違う声が聞えてきた。大きな机に隠れたままだっ  
たが、姿を現さないでも分かる幼い声。

「何で知ってるのマッケンロー。8つ目の死体が見つかった時、ま  
だ暖かかったって」

「何でって、聞いたからだ」  
「誰に？」

「死体安置所の人間に、き」

ブレットは「ごめんね」と謝った後に、話を続けた。

「僕がさ、死体安置所のおじさんや一番最初に駆けつけた刑事のお  
じさん達に、死体が暖かかった事は言わないでって、約束したんだ  
よ。それをさつきおじさん達に聞きに行ったけど、誰にも話してな  
いって言ってた。もちろん、マッケンローにも」

マッケンローは、何も言えずに下を向いた。

「それに、さつき署長に言ってもらったことなんだけど、あれ嘘。  
もうクレアちゃんのアリバイは、マッケンローが言った様にマスタ  
ーが証言してくれた。涎を垂らしながら寝てたって。それで、今回  
の9人目の犠牲者の特徴は、聞き込みで分かったけど、目を奪われ  
るような見事なブロンド。マッケンローが今朝一緒に居たシスター  
の特徴も、綺麗なブロンドだったんだよね。それに、アリバイが証  
明できなかったのはマッケンロー、君なんだよ。どう考えても君が

犯人なんだ、どう考えても……」

ブレットがそう言い終わると同時に立ち上がった。部屋の扉も図ったように開いたので、足早にマッケンローとハートマンの横をブレットが通り過ぎるその時に、マッケンローは呟いた。

「もうすぐ誕生日だったな。ごめんな」

この言葉を聞き取れたのは、ブレットだけだった。部屋に入ってきた男2人をすり抜けてブレットは部屋を出ていった。

5

「あら、珍しく元気が無いわね」

いつもなら無邪気に喋る子が、今はカウンターに腰を掛けて頂垂れていた。

「だってさ。マッケンローが犯人なんておかしいよ、絶対に」

「でも、事件を解いたのはあなたでしょ？」

「解いたって程のことしてないよ。刑事に口止めしたのも少し遅かったから、もしかしたら刑事たちが話しているのを聞いたって言われたら、僕はそれから続けなかった。それに、誰でも怪しく思うよ。だって、遅刻をしないマッケンローが遅刻をしたのが、今年は2回。その2回とも朝に死体が見つかった。次に、署を早く帰ったのは5回。その5回とも夜に死体が見つかった。そして、クレアちゃんを喫茶店に行かせたのは昨日と今日。その2日とも、マッケンローはほとんど店にいないくて、クレアちゃんのアリバイだけをマスターが証明出来て、2日とも死体が見つかった。どう考えても、ワザと自分から犯人になろうとしてるしか思えない」

「もしかしたら、マッケンロー警部はそこまで頭が回らなかったんじゃない」

「本当にそう思うのマリーさん？　だって、マッケンロー僕より頭

いいよ。そのマッケンローが、こんな馬鹿みたいなミスするなんて僕はどうしても思えない。何よりも、正義感強いよ、マッケンローは」

「そうね。けど以外だったわ、あなたがマッケンロー警部を慕ってるなんて」

「まあね。よしじゃあ、僕は死体安置所に行くよ」

「どうして？」

「気になる事があるんだ。それに、もしかしたら本当の犯人の、本当の答えが分かるかもしれないし。そうだマリーさん、クレアちゃんに言つといて」

「何て？」

「帰るんだったら、誰かと一緒に帰らないといけないって。多分落ち込んでるだろうから、僕と同じくらい」

「分かったわ」

ブレットがカウンターの上に立ち上がり背伸びをした。グレックと話して、表情が少し明るくなったブレットは、カウンターからジャンプして降りると、グレックに手を振って走って死体安置所に向かった。

昼になってからハートマンがグレックの前に現れた。そのハートマンの様子を見るとすぐに分かる落ち込みよう。ハートマンの周りの空気だけが、重く暗い影が落ちていた。その様子を見て、グレックが心配しながらも席は立たないでブレットに先程言われた事を言うと、ハートマンはカウンター側にある椅子に体を落として座り、「分かりました」とだけ、微かに聞こえる位の声で言い俯いた。

その頃、マッケンローは取調室で無言を貫いていた。手錠はかけられていなかったが、刑事はマッケンローの前の椅子に1人、聞き取りに1人、扉の前に2人といった4人がいた。マッケンローは、刑事に何を聞かれても、話しかけられても、ただ無言。昼食も摂る

ことなく、刑事は何人も入れ替わったが進展がないまま、夜を迎えた。

ハートマンは、昼に椅子に座って固まったまま夜を迎えていた。グレックは帰り支度をして、そんな様子のハートマンの顔が見えるように屈み、顔を見ながら「一緒に帰ろう」と言ったが、ハートマンは首を横に振って拒否した。そして「警部が来るまでここにいます」と、かすれてしまった声で言った後、グレックが話しかけても反応しなくなった。グレックはお湯を沸かしてコップに入れると、ハートマンに持っていき手に持たせる。心配しながらも、グレックは1人家に帰った。

マッケンローの取調べは夜を迎えてからも続き深夜にまで及んだが、結局何一つ進展がないまま終わりを迎えた。そして、運命ともいえる、12月25日の白く染まったクリスマスが訪れた。

12月25日

「もしかしてあなた、家に帰らなかったの？」

雪を払いながら署に入ってきたグレックの目にまず止まったのが、ハートマンの昨日と変わりなく椅子に座った姿だった。ハートマンの手には、冷め切ってお湯から水に戻ってしまったコップが握られている。そんなハートマンを見たグレックが驚いての言葉だった。それに言葉に、俯いたまま首だけを縦に下げた。そのグレックの驚きと同じ位の時間に、マッケンローの取り調べがまた始まった。

「ブレット君！ 無茶は止しなさい！！」

「だ、大、丈夫ですよ。これぐらい……」

死体安置所は異様な光景に包まれていた。ブレットから上がった煙で部屋が霞みがかかり、真っ赤に少し光すら発している体。その体は異常な熱を帯び、その体を冷ますために常識では考えられない位の汗を掻き、その汗を体の熱で蒸発させていた。それは、傍から見ても分かる、ブレットが能力を使いすぎたために起きた体のオーバーヒート。なぜそのようなオーバーヒートが起きたのか。それは、ブレットが9人目の死体に能力を使い続けていたためだった。その時間は約20時間。いくらこの事件の死体が能力を使っても疲れないとはいえ、体の限界はとつくに超えていた。それでも止めようとしなかったのは、ブレットの意地と、マッケンローとハートマンに対する思いだったのかもしれない。そして、ブレットが能力を使い続けた結果、突然壁が崩れた。雑音で聞き取れなかった犯人の声が鮮明に聞こえ、その声に隠されて聞こえなかった犯人の本当の目的も。

「あ、あの」

死体から離れて、今にも倒れそうによたよたと歩き、死体安置所の人間にあることを伝えると、その場で意識を失った。能力を使わなくなつて気を失つても、体の熱がすぐに下がる事はなかった。

ブレットが気を失った今の時刻は午前6時

“ あら、あの人は？ ”

署の中に入ってきた人物を見てみると、ハートマンの前で屈んで話しかけた。するとハートマンは立ち上がり、その人物と一緒に署を出て行くこうとする。グレックは気になって、寄り添いながら署を出て行くこうとしている人物に声をかけると、その人物の代わりに八

「トマンが小さな声で、「少し出かけてきます」と言つて、2人は並んで署を出て行つた。

それから暫くして、死体安置所の人間が額に汗を浮かべて慌ててグレックの方に走つてきた。ブレットから伝えてくれと頼まれた言葉があるというのだ。なぜあの子が来ないのか不思議に思い「あの子は？」と聞くと、「署の正面で冷やすのは不味いと思つて、裏口から連れて出て、雪を被せて体を冷やしたので、今はだいぶ落ち着いて寝ているのです」と言つた。グレックには一体何のことか分からなかつたが、とりあえずブレットからの言葉を署長に伝えるにいつた。

グレックが席を立つた時刻は午前10時

「マッケンロー君。ブレット君から君が犯人じゃないと言つてきたそうさ。犯人は他にいと。彼の言つ事だから間違えはないと思つが、君の容疑が晴れたわけではない。だから、この署からは出ないでもらいたい」

そう言われてマッケンローは解放された。ただ、マッケンローは部屋を使う事を許されていないため、行く場所がなかつたのでグレックのところに行く事にした。ブレットが何処にいるのか聞こうと思つていたマッケンローだったが、来てみるとグレックの方から声をかけてきた。

「良かったですね、警部。あの子、ブレット警部が随分と頑張つたみたいですよ。マッケンロー警部を助けるために」

「そうだったんですか。ビリーが、ね。以外だったな」

「ここで思い出したようにグレックが言つた。」

「そうさ。さっきまでその椅子に、ハートマンさんが座つて待つて

ましたよ。警部が来るのを」

「クレアですか？」

「そう、その子です。けど、先程出て行きましたけど」

「出て行った？」

「付き添いの方が来て」

「付き添い？」

「ええ。確か彼女は……。そうそう、あの」

グレックの話で名前が出た途端、マツケンローは走って署を出て行った。

それから数分後「そうだ、そうだ」と言いながら、先程の死体安置所の人がグレックの所にやってきた。言い忘れていたことがあったのだと言う。

「ブレット君が、マツケンロー警部をこの建物から出さないでください、て言ってたのを忘れてました」

「え……。もう出て行ってしまいましたけど？」

マツケンローが建物を出た時刻は午前10時半

それから30分近く経ち、ブレットは目を覚ました。

現在時刻は午前11時

ブレットはベットの上で目を覚ました。世界が渦を巻いて回っていたが、ベットから下りて違和感を感じた。その違和感を、その部屋に居た医者に聞いた。

「あの、僕の服変わってるんですけど……」

それを聞いた医者が説明するには、あまりの熱に体を抱える事が出来ず、担架に載せて外まで連れて行った後に、雪に生めたが、すぐに雪が溶けるため、なるべく冷やせるように服を脱がせて何度も

雪を被せたのだという。

「あの、もしかして僕の裸見ました？」

「ええ、もちろん」

“ やっぱ見られたんだ……。ちょっとへこむな……”

医者が女医だったために、ブレットはそう思っていた。頭の中では鐘が鳴り響いていたが、何とか動く事が出来たので、鐘で重たくなった頭を押さえながら、グレックの所まで行く事が出来た。

「随分と無茶をしたようね」

「え、ええ、まあ。でも、マリーさんでも心配してくれるんですね」

そういうと、ブレットは辺りを見回した。そうした後で「マツケンローはどうになりました？」と、グレックに聞いた。

「彼はさっき出て行ったわよ。ハートマンさんを追いかけて」

「出て行った……」

「あなたの忠告を聞く前だったので、止める事が出来なかったわ」  
ブレットは思わず走り出していた。頭の頭痛をすっかり忘れて、教会に続く道を。

すっかり葉が落ちきり、落ち葉の変わりに雪の絨毯が敷かれた並木道を2人は歩いていた。

「大丈夫ですか？ クレアさん」

その優しい声の持ち主は、細く綺麗な手をしていた。頭には何もつけておらず、髪が露になっている。その髪は、見惚れてしまうようなブロンドで、服はシスターが着る物を着て。

「大丈夫です。そんなに弱くないですから、私。わざわざ迎えに来てくても、元々教会に行く予定だったんですよ、レイアさん」

ハートマンに少し遅れて歩いていたのは、シスターレイアだった。いつもならベールを被っていたが、今日は被っておらず、ブロンドの髪の毛のせいで随分と印象が変わって見えていた。

「そうですね。クレアさんはキリシタンでしたね」

「ええ」

「それならやはり、神を信じますか？」

「もちろんです」

ハートマンは立ち止まると、雪が舞い落ちてきている空を見上げながらそう言った。少しだけ見上げただけなのに眼鏡に雪が積もり、慌てて眼鏡を拭こうと眼鏡を右手に持ち、左手で眼鏡拭きを捜し始めた。

「そうですね。それなら神に伝えておくといいですよ」

必死で眼鏡拭きを探していたのでよく聞こえなかつたらしく、「何てですか？」とシスターレイアに振り返った。するとシスターレイアは、ハートマンの目の前まで来ており、右のポケットに手をつ込んで少し屈んでいたハートマンの耳に、シスターレイアは顔を近づけて囁いた。

「今から逝きますと」

そう言うと、ハートマンの顎を持って顔を引き寄せ、シスターレイアはハートマンと唇を触れ合わせた。

マッケンローが息を切らせ2人に追いついた時には、雪の白が血の赤に染まった並木道の真ん中で、上半身がなくなり、顔や腕や下半身が残ったハートマンの死体が寝ていた。そのハートマンの死体の側に服が置いてあった。その服はレイアのもので、レイアは下着だけの姿になっていた。レイアの顔や腕や下半身は、返り血で赤に濡れていた。その赤に染まるレイアの妖艶さに思わず見惚れてしまったマッケンローだったが、すぐに我に返り大きな声を出した。

「どうしてなんだレイア！ なぜ、なぜクレアを殺したんだ！」

レイアは目を逸らさずにマッケンローを見つめている。

「ごめんなさい。けど、ジヨンは私が犯人だって知ってたんじゃないですか？」

「そ、それは」

「だから私が殺した時に、あなたは庇う様に行動をしていたんじゃないんですか？」

レイアが振り返り血を白い雪の上に垂らしながら、下着姿でマッケンローに近づこうとした。その姿に躊躇いながらも、マッケンローは拳銃を取り出して、レイアに向けて構えた。

「それ以上近づかないでくれレイア！　お願いだ、俺は君を」

その言葉を聞かず、レイアはマッケンローの元へと歩みを進める。

「私はあなたになら殺されてもいいの。だからお願い、私を殺して」

一歩ずつレイアの足跡が、マッケンローに向かって雪の上に描かれていく。マッケンローは拳銃を構えたまま「来るな！」と叫んでいるが、レイアは一歩ずつ近づく。そして、レイアの額に拳銃が当たり、雪の上に描く足跡が止まった。

「お願い。私を殺してジヨン」

そのレイアの願いは受け入れられなかった。マッケンローはレイアの額に当たっていた拳銃を手から零して、自由になった手でレイアを引き寄せ抱きしめた。

「ごめんレイア。君を撃つ事なんて出来そうにない。どうやら俺は、君の事を愛してしまっただようだ」

「私事です」

そして2人は抱き合いながら唇を重ねた。その重ねあつた唇が離れ、唇と同じ様に顔も離れた。顔を離れたマッケンローは、レイアを見つめて微笑むと、膝から崩れ落ちた。

「ありがとう。私を愛してくれた20人目の人。そして、さようならジヨン。私が愛した19人目の運命の人」

ブレットは回る世界の中で何とか進むため、頭を手で支えていた。すると5メートル程先に、シスターの服を着て頬を血で真っ赤に染め、その血が固まって赤に染まった頬に、一筋の涙で線を引いたブロンド髪のシスターが雪の降り積もる並木道に佇んでいた。

「あなたがレイア・ノルンですね？」

シスターがその問いに頷いた。そのシスターがブレットに、逆に質問を返してくる。

「あなたが私を見つけたの？」

「ええまあ。それで、マッケンローはどうしたんですか？ あなた最後の目的は、マッケンローのあなたに対する心だったんでしょ？」

「そうよ。私が99年間平穏に暮らすには、私が愛し愛される必要があったの。そして、その運命を受けて生まれたのがジョンだった。だから私は、愛し愛されたジョンの心を胸に、また生き続けるの」「なんて身勝手な……」

「私も！ 私もこんな事したくない。けど、けれどそうしなければいけない運命なの、私やあなたは」

「僕が？」

「そう」

シスターがそう言うと、ブレットに向かい歩き出した。それを確認して、背中付近に隠していた拳銃に手をかける。その拳銃の撃鉄げきてつを引き起こしながら、シスターに拳銃を向ける。静止して狙いを定めず、シスターに拳銃が向いた瞬間に引き金を引いた。拳銃から爆音が響くとほぼ同時に、シスターの額から血が噴出し、弾丸が穴を開けて貫いた。

「人を殺す程度の事に、僕は一一躊躇わないんで」

銃口から上がる煙の向こう側で、額に穴の開いたシスターが膝から崩れ始める。その姿を確認して、背中に拳銃を直そうと後ろを向

いた。その時気づく、ある音がしないと。人が崩れ落ちる音。その音に代わって、キュキュと雪の上を歩く音が聞こえてきた。それに気づいて、慌てて振り返ると、額に穴が開いているシスターが、血を流しながら近づいてきていた。驚いて、直しかけていた拳銃を慌ててシスターに向け、撃鉄を引き起こそうとするがビクともしない。少しだけならと、その拳銃を腹の辺りに下げ目を落とした。なぜならまだシスターとの距離があったからだ。そのはずなのに、拳銃からシスターに目を戻すと、すでに唇が触れる距離に顔があった。そしてブレットはキスをされた。今まで数知れず命を奪い取ってきたキスを。すると、ブレットの回っていた世界が、回るだけでは飽き足らないのか、波打ち歪みだした。それに堪らず膝を付く。息も上がりですが、ブレットが死ぬ事はなかった。その様子を見つめて、気を失いそうになっているブレットに、言葉を置いてシスターは去っていった。

「やっぱり。あなたは私とキスをしても死なないのね。私とキスをして死ななかった人間は、あなたで2人目よ。だからこそ忠告してあげる。気をつけなさい、あなたも狙われるわよ。それじゃ、 merry Christmas and Happy birthday  
ay」

ビリー・ブレットが次に目を覚ましたのは、警察署にあるベツト上だった。ジョン・マッケンロー、クレア・ハートマン。この2人の死体は見つかっていない。レイア・ノルンは、この町で見つかる事は2度となかった。ただ、彼女はこの物語の中で重要であり、またビリー・ブレットの前に現れるかもしれない。

この事件は後に始まるビリー・ブレットの、奇妙にして奇怪な事件たちの本の始まりに過ぎなかった。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8952b/>

---

フォローテックの殺人鬼

2008年11月7日09時19分発行